様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：４４６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６１６０２８

研究課題名（和文）心理学における「関係」および「物語」理論の再構築：養育・療育・看護の現場から

研究課題名（英文）Remodeling the psychological concepts of 'relationship' and 'narrative' in the field of care

研究代表者
東村　知子（Higashimura, Tomoko）

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部・幼児教育学科・准教授

研究者番号：３０４３２５８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：ケアの現場から「関係」と「物語」という二つの心理学的概念の再構築を試みた。哲学をはじめとする文献検討と、養育・療育・看護の現場におけるケア現象の記述との往還を通して、ケアの専門性、傾聴というケアの困難、ケア関係の偶有性と必然性、ケア場面を物語化することの問題について検討した。ケアは偶有的な関係を必然的な関係に変えていくプロセスと表裏一体であること、物語化の権力性を乗り越え豊かな物語を生み出すためには、意味の「隙間」を描こうとする努力と、自らの身体を通した抽象化を行う必要があることを見出し、ケアにおける「関係」と「物語」の新たな見方を提示した。

研究成果の概要（英文）：Care, as well as qualitative psychology, has placed great emphasis on the concepts of ‘relationship’ and ‘narrative’ but there is need for greater examination of them. This project tried to remodel them based on findings in several fields of care: the education and care of people with handicaps, nursing care for people with cognitive impairment, and care relations in parenthood. Firstly, we found that, in the case of special needs education at school, teachers need to become professionals of individual children, not of their disorders. Secondly, an examination of young women’s assumptions regarding birth mothers suggests that there is a hidden process which turns an ‘accidental’ relationship into a ‘fated’ one. Lastly, we examined power structure in care narratives and found that professional discourse which labels people who are cared-for with professional terms have a negative impact on them. These findings open up new views on the concepts of relationship and narrative.

研究分野：ケア学

キーワード：ケア　物語　障がい　認知症　専門性　権力性　偶有性と必然性

１．研究開始当初の背景

心理学は、セラピー、子育て、教育、看護など多様なケアの場をテーマとして扱うとともに、ケア学の源流の一つをなしてきた。しかし、心理学が暗黙のうちに依拠する二つのパラダイム、すなわち物質的なものと精神的なものの二元論、および個（人）を単位とし個が関係を結ぶととらえる伝統的人間観は、ゆきづまりを見せている。こうしたパラダイムは数々の強い批判を受けてきたが、批判に対する十分な反論がなされないまま、旧来のパラダイムに基づく研究が量産されているという状況があった。

２．研究の目的

１．で述べた背景から、本研究では、特にケアに関係の深い「関係」と「物語」という概念に焦点をあて、心理学における新たなメタ理論の構築を試みることを目的とした。この二つは、心理学の旧来のパラダイムの問題をもっとも反映するものと考えたためである。

「関係」についていえば、いうまでもなく、人間はその生の初期から他者との関係を必要とする。ただし従来の心理学的ケア論では、「自己」なるものと「他者」なるものがすでにできあがった時点から出発し、「自己」と「他者」がケアし／ケアされる関係を論じているという限界があった。そこで本研究では、ケアの現場で生じている関係そのものを発生的な視点からとらえたケア論を展開するための理論的基盤を整備することを目指した。

「物語」もまた、ケアという現象を考えるうえで重要な役割を果たしている。ケアし、ケアされるという関係は、通常言葉で語られることによって明らかにされ、多くの心理学研究もそうした語りをデータとしてきた。しかし、物語（ナラティヴ）という手法は心理学においてあまりにも広がりすぎ、その限界が見えなくなっている。本研究では、こうした限界を踏まえた物語理論を構築するために何が必要かを見極めることをもう一つの目的とした。

３．研究の方法

２．で述べた目的にもとづき、次の二つの側面から研究を進めた。

(1)文献検討：主に哲学、関係論的自己論、社会学的コミュニケーション論、物語論の文献を検討し、ケア論の新たなパラダイム構築の手がかりを探求した。哲学の文献については、研究会を月 1～2 回継続して行い、共同で検討を行った。

(2)フィールドにおけるケアの現象の再記述：(1)と並行し、主に障がいのある子どもの養育・療育、および認知症ケアに関して参与観察やインタビュー、アンケートなどを行い、そのデータを(1)でえられた視点から捉えなおすことを試みた。

(3)「関係」と「物語」を捉える新たな視点の抽出とまとめ：(1)と(2)の往還、および二回の学会シンポジウムでの議論を通して、新たな心理学的ケア論を構成する視点を抽出し、試論としてまとめた。

４．研究成果

「ケア」に包摂されるフィールドは多岐にわたり、「関係」や「物語」という概念も非常に広い。そこで研究を進めるにあたり、以下の 4 つのテーマを設定した。本項ではこの 4 つのテーマに沿って、得られた成果について述べることにする。

(1)ケアの専門性：ケアの本質は、ケアする者とケアされる者との関係にあるとわれわれは考える。一方、ケアには「専門性」が強く求められるという現状がある。そこでわれわれは、ケアに携わる者が有する（べき）とされる「専門性」について、障がい児教育および療育の事例から検討した。一般に特別支援教育の「専門性」とは、子どもに何らかの力（たとえばコミュニケーションスキル）を身に着けさせるために効果的なトレーニングを行う能力と考えられており、「専門家」にはそれを誰でもできるようにマニュアル化することが求められる。しかし、われわれは特別支援学校および支援学級でコミュニケーションが難しい子どもの教育に取り組む 4 名の教師の実践から、新たな〈専門性〉の構成要素として、「他者として出会う」、「コミュニケーションを徹底する」、「子どもから学ぶ」の三つを見出した。ケアする者にとって、理解しがたいふるまいを見せる子どもという「他者」と出会い、そこで子どもから投げかけられたどんな小さなことも受け止めてそれを投げ返すことで結果的にコミュニケーションを接続させる。自分がもともともっているものさしで子どもを見るのではなく、子どもを理解するために子どもから学ぶ者になる。つまり、障がい一般あるいは特定の障がいについての「専門家」ではなく、その子どもの〈専門家〉になることが、ケアにおいて重要であり、そのようにして相手との関係をつくることこそがケアの〈専門性〉であるという結論が導かれた。

(2)「傾聴」というケアの困難・危険性：セラピーをはじめさまざまな対人援助場面において重視されるケア技法の一つに「傾聴」がある。質的心理学研究においても、インタビュー等では傾聴を行い、研究協力者との関係性（ラポール）を築くことが協調されてきた。このように傾聴はこれまで善きもの、積極的になすべきこととされ、ケアにおける傾聴の「危うさ」には十分に目が向けてこられなかったのではないかとわれわれは考えた。そこで、看護と福祉相談の現場から、傾聴の困難について検討した。

二つのフィールドに共通していえるのは、傾聴すなわち心理的支援に特化したケアは、必ずしも現場に即していないということで

ある。認知症ケアにおいては、認知症の人々が示す不安や苦悩の背後にことば以前の身体の訴えがあることに、注意が必要である。生理的ケア（身体のお世話）と心理的ケア（心の慰安）を区別して行うことはできない。

一方、福祉相談の現場は、相談員の傾聴によって、他者の承認を強く求める相談者が相談員に過剰な期待を寄せ、相談が長期化するというジレンマを抱えている。つまり、ケアする者の存在によってケアのニーズが新たに作られるという逆説が存在する。

ことばに特化したケアは、そのよって立つ基盤が脆弱であり、ことばを身体やその人が置かれた社会状況にいわば「つなぎとめる」ことがケアする者に求められるといえるだろう。また、ケアというかかわりが、必然的にお互いを相手との人間〈関係〉へと巻き込むものであるにもかかわらず、ケアは必要なときにだけ行われ、そこで結ばれるのも一時的な「関係」であるという矛盾が明らかになった。

(3)ケア関係の偶有性と必然性：障がいのある子どもの養育について考察を深めるため、短期大学生を対象に出生前診断に対する意識について調査した。その結果、診断自体には 34%が賛成していたが、結果を受けて中絶することには反対が 68%と圧倒的に多く、「診断を受けない」が 55%と「受ける」を上回った。診断を受けない理由として本研究の対象者に特徴的に見られた回答が、「どんな子どもでも自分の子どもに変わりないから」であった。「自分の子ども」だから「育てる」という理屈は日常的な感覚としては理解できるものの、論理的には飛躍しているように感じられる。

われわれは、「自分の子どもだから育てる」という結びつきを当然のものにするような、通常は表にあらわれないプロセスが存在するのではないかと考えた。妊娠するかしないか、どんな子どもが生まれるかは、「偶有的」つまり他でもありえた可能性を有している。ケアは、そうした「偶有性」を「必然性」に変えていくプロセスと表裏一体なのではないか。生まれたばかりの子どもは昼夜を問わず容赦なく他者のケアを要求し、親（およびそれに代わる者）はそれに必死で応えようとする。そうしたケアのプロセスを潜り抜ける中で、「他の子どもでもありえた」偶有性は、「この子以外にありえない」必然性に変わっていくのではないか。

教師や看護師などの職業としてのケアにも同じことがいえる。どの教師が担任になるか、どの看護師が受け持ちになるかは、偶有性に左右される。偶然始まった関係においてケアという実践を積み上げていく中で両者の関係は必然的なものになっていく。親子と異なるのは、関係に終わりがあること、また必然的なものだと思えなければ転校や転院によって相手を変えることも可能であるという点であろう。そのような違いはあるが、ケアする者とケアされる者の関係が必然的になることでケア関係はさらに深まり、ケア関係の深まりによって必然性がさらに高まるという連関があるのではないかと考えられる。

(4)物語化の権力性を乗り越える身体性：ケアという実践は、研究者やケアの担い手によって「物語化」される。しかし「物語化」には権力性の問題が付きまとう。第一に、ケアされる側の人々は、言葉を持たない、あるいは言葉でうまく表現することができないなど、物語れない場合も多い。そのため結果的に、ケアする側や研究者がたとえ悪意はなくても勝手に物語を作り上げてしまう危険性がある。第二に、他者が語る自己物語を聴取・理解するとき、聞き手がそこに異議を挟むことはほとんどない。つまり語り手は物語をいかようにも作り上げられるという「特権性」の罠が潜む。

とはいえ、研究という営みをする以上、「物語化」を避けて通ることはできない。われわれはこのような物語化の権力性を乗り越えるための手がかりを、「星の王子さま」の物語分析とある NPO におけるユニークな障がい者支援の実践に探った。

「星の王子さま」には、ケア論に関する多くの示唆を読み取ることができる。例えばこの物語の冒頭には、いびつな帽子のような絵が描かれている。大人たちはそれを「帽子」だと言ってわかった気になるのだが、実は主人公が描いたのは「ゾウを飲み込んだボア」である。このエピソードが示すのは、コミュニケーションのなかで「わかった」、「わかる」ということは、必ずしも新たな「対話」を生み出さないということである。大人は常に自分の枠組みで相手を認識しようとする。ケアの現場においても、たとえある人を「認知症高齢者」ということでその人のことがわかったような気になり、それが「プロのわかり方」だとされている。しかしそれは本当の意味での理解すなわち専門性ではなのではないか。

もう一つは「なじみになる apprivoiser」という表現である。物語の中では、なじみになった者しか知りえないことがあるということが指摘されている。一方、「専門家」たちはそうした主観的なものはできるだけ排除し、客観的なものについて語るべきだと主張する。このように両者の理解の方向は真っ向から対立する。これらの指摘は、(1)のケアの「専門性」と〈専門性〉のちがいとして述べたことに重なるものである。

次に、ある NPO における障がい児者支援から「物語化」の権力性について検討した。この NPO ではスタッフが利用者に対して非常にユニークな見方で関わりを持っている。われわれは、20 歳の重度の自閉症で聴覚障害も併せ持つ男性 0 さんの事例を検討した。0 さんには、2 階から 1 階まで 10 分以上かけてゆっくりゆっくり階段を下りるという行動が見

られる。スタッフはその一部始終をただ録画する。録画したビデオを見ると、0 さんは一段降りては立ち止まり、いろんなところを眺めたりにおいをかいだりした後、ようやく次の一歩を踏み出す。このようなあまりにもスローな 0 さんの動きに、われわれは意味を読み取ることができず、ずっと見続けることが難しくなる。

われわれは無意識のうちに、出会うできごとや事物を意味のあることと意味のないことを選別してしまっている。0 さんの動きのほとんど（階段を下りる動作以外）は、われわれの基準からすれば意味のないことにしか見えない。しかし逆に言えば、われわれが意味がないと思っているところ、いつも見逃しているところには、いわば「隙間」がたくさんあるということである。その隙間を描けるような言葉を探すことが、ケアにおいて重要な鍵を握るのではないかとわれわれは考える。0 さんの動き、0 さんの存在の仕方は、見る人それぞれに違った形の反響を呼び起こす。それをただ「障がい」と言い切ってしまうのではなく、見る人がそれぞれの見方を出し合い、0 さんについて共に考えることが大切なのではないか。理解の隙間を感じさせ、さまざまな理解のしかたを可能にする 0 さんのような人を豊かな存在としてとらえ返せば、ケアされる立場にある人は「物語」の豊かな源泉として浮かび上がってくる。ケアにおいて、ひいては研究において大切なのは、「○○障がい」、「認知症」のような正しいが貧しい理解ではなく、正しくないかもしれないがさまざまな解釈に開かれた豊かな物語を生み出すことである。そこでは、物語を評価する基準は「正しさ」ではなく、「精緻さ」におかれるべきだろう。

本項の最初に述べたように、物語化は権力性の問題から完全に自由ではありえない。しかし本来、物語化するということの根底にあるのは、語る他者という身体を潜り抜けること、すなわち「身体を通した抽象化」であるとわれわれは考える。身体を通した言葉だから正しいというわけではない。しかし、他者の存在によって自らの枠組みを問い直し、さまざまな見方を響かせることは、権力性をはらみながらも豊かな営みとなりうるのではないか。問題は、相手と真摯に向き合い、身体を潜り抜けること抜きに、出来合いのことばや枠組みを当てはめることで理解できたような気になってしまうことであろう。物語化のありようによって、ケアという営み、さらには研究という営みは豊かなものにも非常に貧困なものにもなりうる。われわれに求められるのは、容易に他者に利用されない、ケア現場に根差した豊かな物語を紡ぎだしていくことである。

引用文献

①アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ、星の王子さま（稲垣直樹訳）、平凡社、2013

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①東村　知子、出生前診断に対する短期大学生の意識－展開されるロジックと潜在する「妊娠－出産」観－、奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要、査読無、46 号、2015、101-111
http://ci.nii.ac.jp/naid/110009978917

②西川　勝、あんなふうに踊りたい－身体のことば－、東京女子医科大学看護学会誌、査読無、9 巻、2014、50-50
http://ci.nii.ac.jp/naid/120005423988

③山口　真希、麻生　武、役割遊びが苦手なＨ君のプレイセラピー、発達・療育研究、査読無、28 号、2012、61-75

〔学会発表〕（計６件）

①東村　知子、西川　勝、麻生　武、尾張　美途、ケアと「物語」－ケア関係に変容をもたらす物語の生成と可能性、日本質的心理学会第 12 回大会、2015 年 10 月 4 日、宮城教育大学（宮城県・仙台市）

②東村　知子、特別支援学校における発達障がいの子どもへのかかわりの分析、日本発達心理学会第 26 回大会、2015 年 3 月 20 日、東京大学（東京都・文京区）

③西川　勝、ケアを哲学する、西洋哲学・倫理学会秋季公開講演会（招待講演）、2014 年 12 月 18 日、大谷大学（京都府・京都市）

④西川　勝、看護における言葉と身体－人と人の間から立ち上がる現象、第 9 回東京女子医科大学看護学会学術集会（招待講演）、2013 年 10 月 5 日、東京女子医科大学（東京都・新宿区）

⑤東村　知子、西川　勝、麻生　武、白波瀬達也、傾聴の暴力性－自己物語を聴くことの危うさ、日本質的心理学会第 10 回大会、立命館大学（京都府・京都市）

⑥東村　知子、障がいのある子どもの親として生きる－地域ピアサポートグループにおける語りの実践、日本発達心理学会第 24 回大会、2013 年 3 月 15 日、明治学院大学（東京都・港区）

〔図書〕（計２件）

①東村　知子、麻生　武、発達支援の場としての学校－子どもの不思議に向き合う特別支援教育、ミネルヴァ書房、2016、264

②東村　知子、質的研究という営み、論文という物語り、物語と共約幻想（川野健治、八ッ塚一郎、本山方子編著）、新曜社、2014、142-148

６．研究組織

(1)研究代表者

東村　知子（HIGASHIMURA, Tomoko）

奈良学園大学奈良文化女子短期大学部・幼
児教育学科・准教授
研究者番号：３０４３２５８７

(2)研究分担者

西川　勝（NISHIKAWA, Masaru）
大阪大学・コミュニケーションデザイン・
センター・特任教授
研究者番号：１０４２０４２３

麻生　武（ASAO, Takeshi）
奈良女子大学・理系女性教育開発共同機
構・特任教授
研究者番号：７０１８４１３２